コロナ禍における椹野川河口干潟等の自然再生活動について

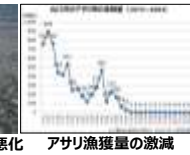
自然保護課　上原正義

2003年頃の椹野川流域

砂漠のようなヒノキ林

ヨシの繁茂した吉敷川

カキ殻の堆積・干潟底質の悪化



アサリ漁獲量の激減

やまぐちの豊かな流域づくり構想（椹野川モデル）と自然再生協議会

- ２００３年
  「やまぐちの豊かな流域づくり構想（椹野川モデル）」を策定
- ２００４年
  椹野川河口域・干潟自然再生協議会を設立

もり・かわ・うみを育むふるさとの流域づくり

水循環の向上

生物多様性の向上

漁場環境の改善

親水性の向上

「里海」の再生を目指す

椹野川河口干潟（山口湾）について

かつて昭和初期頃はアサリやエビの好漁場

干潟の底質、アサリ、カブトガニ等に着目した取組を実施

椹野川河口域・干潟自然再生協議会の取組（抜粋）

干潟耕うん

アサリ再生活動

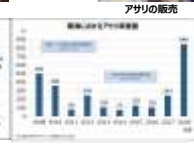
流域の恵の試食会

生物観察会

潮干狩り体験

アサリの販売

親水性の向上



干潟の生物生産機能の向上

持続的な里海の再生に向けて

コロナ禍の椹野川河口域・干潟自然再生協議会の活動概要と参加者数

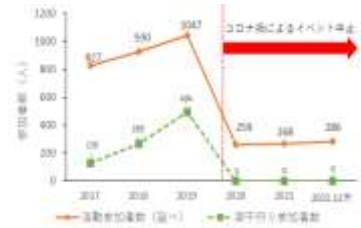
2020年以降、自然再生協議会の活動は、コロナ禍の影響を大きく受けた

(単位：延べ参加者数)

活動		2019	2020	2021	2022
干潟再生活動	干潟耕うん、潮干狩り、生物観察会 椹野川の流域の恵の試食会	420	中止		
	被覆網によるアサリ再生		16	底生生物モニタリング時に被覆網の補修・交換	
カブトガニ幼生生息調査・観察会		120	113	33	33
底生生物モニタリング		42	54	38	45(12月現在)
地元小学校と連携した環境学習		37	35	38	20
クロツラヘラサギの保全のための海岸清掃(共催)		201	中止	71	89
協議会総会		対面会議	書面会議		
ブルーカーボンWG					設立・会議

コロナ禍の前後における活動イメージ

協議会の活動結果　活動参加者数

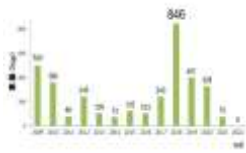


流域関係者が連携して行ってきた、干潟再生活動の中止により、
活動参加者数や潮干狩り参加者数が大幅に減少した

協議会の活動結果　アサリ再生活動

委員を主体としたアサリ再生のための被覆網のメンテナンス

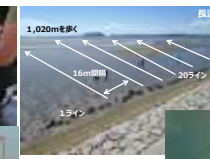
台風等による被覆網の剥がれや覆砂



アサリの収穫量

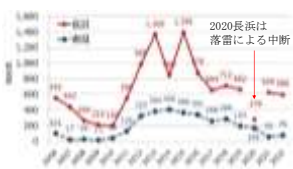
維持管理の人手不足により、アサリ再生に係る干潟環境が悪化した。
また、潮干狩りの中止や漁業者の高齢化等による漁業機会の減少もあり、収穫量が減少した。

カブトガニ幼生生息調査

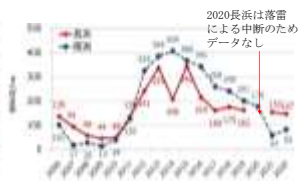


コロナウイルス感染拡大時期と重なり、データを継続して取得するため、
長浜では調査レーンを偶数レーンに減らして、委員のみで実施した。

カブトガニ幼生生息調査



カブトガニ幼生発見数



カブトガニ幼生生息密度

概ね例年と大きな差はなく、調査レーンを減らしたことによる
データの継続性には大きな問題は確認できなかった。

地元小学校との連携

座学や、干潟でのカブトガニや水生生物の授業

地元をPRするポスター・歌・ダンス・CMを作成

「総合的な学習の時間」は概ね予定どおり実施し、上級生から活動を引き継ぎ、
1年かけて地元の干潟などの自然環境への理解を深めている。

ブルーカーボンワーキンググループの設置

ブルーカーボンについての知見を収集し、協議会の活動に生かすため、
外部講師による講演等の情報収集や山口湾で取り組んでいく上での課題等を議論

コロナ禍で生じた課題

コロナ禍においても活動を工夫しながら実施してきたが、以下の課題が生じた。

・干潟再生活動を３年間中止したことによる、**流域関係者間の連携の弱体化の懸念**

・維持管理等の人手不足による**アサリ再生に係る干潟環境の悪化**

・潮干狩りの中止や高齢化が進む漁業者の漁業機会の減少による**アサリの収穫量の減少**

・イベントの中止等の結果、**再開後のボランティアを確保できるかどうかの懸念**

全国の自然再生協議会の状況

出典：令和２年度自然再生協議会全国会議 資料５「新型コロナウイルスが自然再生協議会に与えた影響」
（環境省請負業務 (株)総合環境計画）

全国の自然再生協議会の状況

出典：令和２年度自然再生協議会全国会議 資料５「新型コロナウイルスが自然再生協議会に与えた影響」
（環境省請負業務 (株)総合環境計画）

全国の自然再生協議会の状況

・ほとんどの自然再生協議会がコロナ禍の影響を受けた。

・活動量が５割以下になった協議会も５６％いた。

＜コロナ禍の影響に対する意見等の抜粋＞

・委員に高齢者が多く、コロナ禍のリスクが高いため、活動の自粛。

・委員間での活動に係る見解の違い、特定の委員に対する負担増。

・ボランティアの中止による維持管理状況の悪化。

・再開後のボランティア を確保できるかどうかの懸念。

まとめ

１　干潟再生活動について

・耕うん作業や被覆網の設置作業などを人海戦術で実施してきたが、コロナ禍では縮小・中止を余儀なくされた。

・環境保健センターと実施している底生生物モニタリングからも、アサリが減少した結果となっていたことから、被覆網の維持管理などの干潟再生活動が重要であることを再認識した。

・一旦途切れた活動を再度、盛り上げていくには、関係者が安心して活動できる工夫を考えながら、流域関係者やファンクラブと連携して推進していくことが必要。

２　調査研究等について

・カブトガニ幼生生息調査や底生生物モニタリングは、継続してデータを取ることが重要。

・コロナ禍で実施した調査手法について、将来的に同様な事態が発生した際の参考となるように、評価・検討することも必要。

おわりに

自然再生活動は、できることから取り組み、科学的な検証を行いつつ、順応的に活動を行うこととしており、これからもコロナ禍やコロナ後を見据えて、できることを工夫し、活動に資する可能性のあるものは可能な範囲で取り入れながら、流域関係者等と連携して進めていきます。

やまぐちの豊かな流域づくり（椹野川モデル）や、椹野川河口域・干潟自然再生協議会の活動は、環境保健センターをはじめとする関係委員の皆様やボランティア等の協力があって成り立っています。改めて関係者の皆様に御礼申し上げます。